

どくろ 復活！ 横尾忠則の髑髏まつり

Revival! Yokoo Tadanori's Skull Festival

会期

2025年9月13日(土)―12月28日(日)

開館時間

10:00～18:00

※入場は閉館の30分前まで

休館日

月曜日

※ただし9月15日(月・祝)、10月13日(月・祝)、11月3日(月・祝)、11月24日(月・振休)、は開館、9月16日(火)、10月14日(火)、11月4日(火)、11月25日(火)は休館

会場

横尾忠則現代美術館



ポスターデザイン：横尾忠則

展覧会について

横尾忠則の作品には、溢れる生命力と対照的に「死」の影が漂います。髑髏や骸骨のように死を暗示する図像から、他界した同級生の写真、空襲で赤く染まった空など自身の記憶に由来するもので、さまざまな死のかたちが、鮮やかに力強く、観る者を挑発します。

本展では、作品に繰り返し用いられる図像を手がかりとして、死を見つめながら生を描き続ける作家の「死」への眼差しに迫ります。

第1章では髑髏に加え、横尾独自の死の寓意に着目し、絵画をとおして横尾の死生観の形成を辿ります。

第2章では、生と死が共存する祝祭的な風景が展示空間に立ち上がります。食器や衣服など、日常に宿る髑髏たちが、此岸と彼岸を繋ぐ旅に誘います。

第3章はポスターによる髑髏まつりです。かつて街を彩った髑髏たちが、時を経て大集合します。

2020年、コロナ禍により開幕直前で中止となった「横尾忠則の髑髏まつり」を再構成してお届けする、新たな祝祭をお楽しみください。

第1章 死とともに

生命力溢れる絵画にも、一見ポップなポスターにも、横尾が描く世界には「死」が潜んでいる。髑髏や骸骨といった象徴的な図像のみならず、首吊り縄や古い肖像写真、赤く染まった夜空など、独自の死のメタファーが不穏な空気をもたらしている。

横尾の最初の記憶は、「死」の概念の獲得とともにあるという。年老いた養父母のもとで育った横尾は、彼らの死によって自分ひとりが取り残されることを恐れた。その一方で、南洋一郎や江戸川乱歩による死と隣り合わせの冒険譚に夢中になり、戦時中には神風特攻隊に憧れた。少年時代の横尾にとって、「死」は、恐怖と好奇心、憧れが詰まった未知の世界であった。

グラフィックデザイナーとして脚光を浴びた 1960 年代後半には、首吊りのポスターや自身の死亡通知で自らの死を演出する。「死」をシミュレーションすることで恐怖を乗り越えようとしたのである。さらに 1970 年代には、敬愛する三島由紀夫の死とインド旅行をきっかけに精神世界に傾倒。横尾の関心は「死」と「生」をとりまく宇宙、超常現象、古代文明、神話、宗教へと拡大し、その断片が作品のうちに放たれていく。

しかし、画家転向を経て徐々に神秘主義的な要素は影を潜め、1990 年代には「私」という存在の探求が創作の原動力となる。それまで蓋をしていた記憶の箱を開けることで、横尾は過去の「私」と出会う。精神世界の彷徨で得た宇宙的視点に、「私」の記憶の風景が融合した作風は、現実と虚構、過去と現在、生と死、聖と俗が混交する、豊潤なヨコオワールドの核となっていく。

横尾の脳が膨大な記憶と概念が詰まった貯蔵庫であるなら、肉体はその膨大な情報を瞬時に取り出し、結びつけ、画面に定着させるブラックボックスといえる。近年は意図的に自我を封じ、肉体に寄り添った表現を追求する横尾だが、それでも作品が「死」の影を纏い続けるのは、横尾の生の中に膨大な「死」のかたちが存在する証なのだろう。



《芸術の愛》 1994年
227.3×181.8cm、アクリル・布
三宅デザイン事務所蔵



《死の中の生》 2000年
65.2×53.0cm、油彩、コラージュ・布
高橋龍太郎コレクション蔵

髑髏と冒険



少年時代の横尾にとって、小説に登場する髑髏は、異界へ誘うアイテムであった。当時の「血湧き肉踊る」高揚感に創作の原点を求めた横尾は、1992 年頃から南洋一郎の「バルーバの冒険」シリーズや江戸川乱歩の「少年探偵団」シリーズ、ジュール・ヴェルヌの『海底二万里』等の挿絵の模写に励んだ。そして、横尾の手で命を吹き込まれた登場人物は、髑髏が転がる洞窟や海底に召喚される。生と死が循環する舞台を興味津々に覗き込む少年たちは、冒険物語に入り込んだ横尾自身なのである。

《Experimental Report》 2008年
19.0×20.0×22.0cm、プラキャスト、FRP他
横尾忠則現代美術館蔵

自己の死―首吊り縄

1965 年、「自分自身のための広告」として、旭日を背景に首を吊る自画像を描いたポスター《TADANORI YOKOO》を制作した横尾は、1967 年にはデザインジャーナル誌に自らの死亡通知を掲載、1968 年には『横尾忠則遺作集』と題した初の画集を出版する。時代の寵児として脚光を浴びる最中での相次ぐ「死」の演出は、現実的な「死」の恐怖から逃れるための「死」のシミュレーションであり、定着した自身のスタイルを葬り去ることで新たな創造を迎え入れる儀式でもあった。

画家転向後には《地球の果てまでつれてって》(1994 年) に再び首吊りの自画像が現れるが、《T+Y 自画像》(2018 年) 以降は「首吊り縄」が独立した画像となり、死と再生のしるしとして、横尾の存在と不在を暗示する符牒として、より象徴的に用いられるようになる。



《TADANORI YOKOO (自主制作)》 1965年
104.6×75.4cm、シルクスクリーン・紙
横尾忠則現代美術館蔵



《地球の果てまでつれてって》 1994年
182.1×227.9cm、アクリル・布
横尾忠則現代美術館蔵

Yokoo Tadanori Museum of
Contemporary Art
Y+T MOCA
横尾忠則現代美術館

他者の死ー写真のコラージュ

郷里での同級生との集合写真（1970 年、篠山紀信撮影）をもとに描かれた《記憶の鎮魂歌》（1994 年）において、横尾は他界した同級生を学生時代の姿で加筆した。《彼岸へ》（2000 年）、《友の不在を思う》（2003 年）では、歳を重ねるごとに増えていく同級生の死の現実を、描くことによって受け止め、絵画の中に鎮魂の想いを込めた。

《懐かしい靈魂の会合》（1998 年）では、コラージュされた肖像写真が靈魂のように空を漂っている。阪神・淡路大震災で失われた命への追悼も込められた作品だ。

写真は常に過去であり、被写体はいつか死を迎える。過去の一瞬を絵画に閉じ込める行為は、横尾にとって時空を超えた死者との対話であり、祈りの儀式のようなものなのだろう。



《懐かしい靈魂の会合》 1998年
227.5×182.1cm、アクリル、コラージュ・布
横尾忠則現代美術館蔵

闇の向こう側

故郷の夜を描くため撮影した写真に端を発する絵画シリーズ「Y字路」。2本に分かれた道の先が消失点となる構図であり、分岐点に立つ者は見えない未来を選択せざるを得ない。そのいずれを選んでも闇の向こうに「死」があることを私たちは知っているが、「死」の向こう側を知る者はいない。だからこそ、見えない闇に向かって歩き続けることができるのだろう。



《農道時間》 2009-2013年
180.0×240.0cm、油彩、スプレー塗料・ダンボール
横尾忠則現代美術館蔵

第2章 此岸と彼岸

幼い頃「死」の概念に出会った故郷の川、冒険小説の舞台となる海や洞窟、夢に導かれて主題となった滝、繰り返し引用されるアルノルト・ベックリンの《死の島》など、横尾作品には水辺の風景が数多く登場する。そこに浮かぶ舟は、此岸と彼岸の間を漂っているかのようだ。

横尾の視点は天上の川にも向けられる。無数の星が輝く天の川は、故郷で見た夜空なのだろう。星を仰ぎながら、横尾は自身の運命について考えていたという。生命が誕生し還っていく宇宙は、郷愁をたたえながら、異界への憧れを誘う。

天と地は相似形、生と死は表裏一体、そんな宇宙観、死生観が横尾の絵画の根底に流れている。

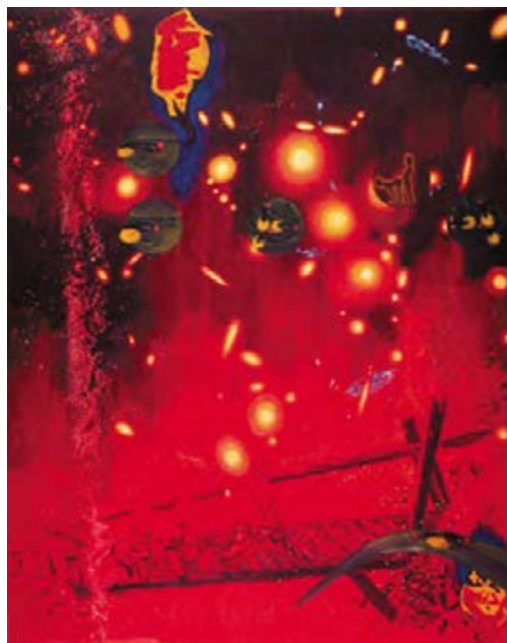


《死者の洞窟》 1985年頃
180.0×240.3cm、アクリル・板
横尾忠則現代美術館蔵

赤の宇宙

1996年から1997年にかけて、横尾は20点以上の赤い絵画を制作する。一見幻想的な満天の星空は、少年時代に横尾が故郷で目にした現実の風景だ。B29が神戸や明石を爆撃すると、燃え盛る炎が夜空に反射して、横尾が住む町から真っ赤に見えたのだという。

赤から黒へのグラデーション（実際は赤と緑の混色による）は、血の色のようにあり、無数の星や蛍の光は死者の魂を連想させる。



《宇宙蛍》 1997年
227.3×181.8cm、アクリル・布
兵庫県立美術館蔵

死を忘れるな

横尾は、「死」を日常に引き寄せることで、生と死を一体化しようとする。こうしたアプローチが顕著なのは日常を彩るデザインだ。横尾が手がけた食器、衣類といった日用品の中では髑髏が笑い、骸骨が踊る。人間が生きるために必要な衣食住に潜ませた「死」のモチーフは、横尾流のユーモアあふれる「メメント・モリ」のメッセージである。



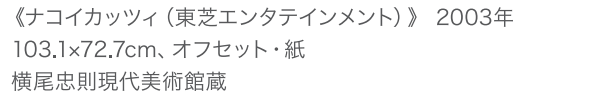
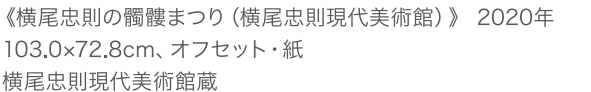
《髑髏絵皿》 2000年
陶器
作家蔵（横尾忠則アーカイブ）



《Y+T MOCA 髑髏マグ》 2012年
陶器
作家蔵（横尾忠則アーカイブ）



《髑髏サンダル》
作家蔵（横尾忠則アーカイブ）



関連イベント

講演会「ちょっと真面目な髑髏のお話」

- 世界中から集めた 約8000点ものシャレコーベ（髑髏）
コレクションを誇るシャレコーベミュージアムの館長に
よる、楽しく髑髏の魅力に迫るお話です

講 師 シャレコーベミュージアム館長
日 時 11月23日（日・祝）
 14:00—15:30
会 場 当館オープンスタジオ
参 加 費 無料



シャレコーベミュージアム（兵庫県尼崎市）
外観

ギャラリーツアー

- 担当学芸員と会場を巡りながら作品を鑑賞します

講 師 当館学芸員
日 時 10月12日（日）、11月15日（土）、12月14日（日）、12月20日（土）
 各日14:00—14:45
集合場所 当館オープンスタジオ
参 加 費 無料、ただし要観覧会チケット（高校生以下 入場無料）

※掲載の内容は変更される場合があります

※その他のイベント情報については当館ホームページをご覧ください

基本情報

復活！横尾忠則の髑髏まつり

2025年9月13日(土)―12月28日(日)

開館時間 10:00―18:00 ※入場は閉館の30分前まで

休館日 月曜日 ※ただし月曜日が祝休日の場合は開館し、翌平日休館

主 催 横尾忠則現代美術館([公財]兵庫県芸術文化協会)

「瀬戸芸美術館連携」プロジェクト実行委員会(事務局:公益財団法人 福武財団)、
独立行政法人 日本芸術文化振興会、文化庁

助 成 一般財団法人 地域創造

協 賛 株式会社 中川ケミカル

協 力 ホテルオークラ 神戸 アートプラネット・ワイ、
HIGURE 17-15 cas、シャレコーベミュージアム



令和7年度日本博2.0事業(委託型)

観覧料 一般800(600)円、大学生600(450)円、70歳以上400(300)円、高校生以下無料

※()内は20名以上の団体および前売料金

※障がいのある方は各観覧料金(ただし、70歳以上は一般料金)の75%割引、その介護の方
(1名)は無料

※割引を受けられる方は、証明できるものをお持ちのうえ、会期中美術館窓口で入場券をお買
い求めください

兵庫県立美術館との相互割引

- ・兵庫県立美術館の特別展またはコレクション展のチケット半券のご提示で、当館企画展を団体割引料金でご覧いただけます
 - ・当館企画展のチケット半券のご提示で、兵庫県立美術館の特別展またはコレクション展を団体割引料金でご覧いただけます
- ※会期中のチケット半券に限り有効です

「瀬戸芸美術館連携」プロジェクトとは

2025 年 4 月 18 日から開催されている「瀬戸内国際芸術祭（瀬戸芸）2025」の広域連携事業として、瀬戸芸の会期中を中心に、香川・岡山・兵庫 3 県の 8 つの美術館で、日本人の現代アーティストによる作品を中心とした展覧会を行います。香川県 4 館（香川県立ミュージアム、高松市美術館、丸亀市猪熊弦一郎現代美術館 MIMOCA、直島新美術館）、岡山県 2 館（岡山県立美術館、大原美術館）、兵庫県 2 館（兵庫県立美術館、横尾忠則現代美術館）で開催されます。瀬戸芸とほぼ同時期に大阪・関西万博が開催されることから、海外からのお客様にも瀬戸内に多く来ていただけることを期待し、最先端の現代アートやそれぞれの地域の文化・魅力を発信するため、8 館共通の割引チケットの発売や周遊ツアーも催行します。これにより、瀬戸内からアートのメッセージを発信し、瀬戸内がアートの聖地として位置づいていくことを目指します。

※当館開催の展覧会では、「横尾忠則の肉体派宣言展」（8 月 24 日まで）と「復活!横尾忠則の髑髏まつり」が対象です

お問合せ

横尾忠則現代美術館

〒657-0837 兵庫県神戸市灘区原田通3-8-30

tel. 078-855-5607(総合案内) fax. 078-806-3888

学芸担当: 平林恵<hirabayashi_megumi@ytmoca.jp>

広報担当: 早水千尋<hayamizu_chihiro@ytmoca.jp>

※画像データは当館ウェブサイトのプレス専用ページ(<https://ytmoca.jp/press>)からお申し込みいただけます
ウェブサイトに掲載されていない画像は、上記連絡先までご請求ください